

## 今週の為替相場見通し(2017年10月16日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		111.69 ~ 112.85	111.86	110.80 ~ 113.00
ユーロ	(ドル)		1.1716 ~ 1.1880	1.1825	1.1600 ~ 1.2000
(1ユーロ=)	(円)		131.86 ~ 133.50	132.21	130.00 ~ 134.00
英ポンド	(ドル)		1.3060 ~ 1.3337	1.3282	1.3150 ~ 1.3500
(1英ポンド=)	(円)	*	146.96 ~ 149.27	148.56	147.50 ~ 150.50
豪ドル	(ドル)		0.7747 ~ 0.7898	0.7895	0.7800 ~ 0.8000
(1豪ドル=)	(円)	*	87.25 ~ 88.31	88.18	87.50 ~ 89.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

為替営業第二チーム 岡本 明生

(1)今週の予想レンジ: 110.80 ~ 113.00 円

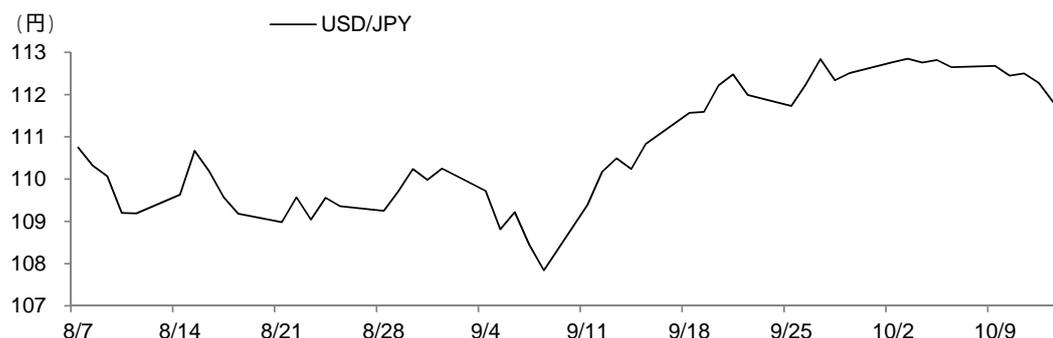
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上値重い展開。週初9日に112円台後半でオープンしたドル/円は、日米休場のため市場参加者が限定され、また北朝鮮・朝鮮労働党創設記念日を翌日に控えて様子見ムードとなり、112円台半ばから後半にかけての狭いレンジ内で小動きとなった。10日は東京仲値にかけてドル買いが限まり、一時週高値となる112.83円をつけたものの、北朝鮮の動きが懸念される中で上値追いは強まり、週末にトランプ米大統領とコーカー共和党上院議員がお互いに非難しあったことから税制改革案が難航するとの見方が強まると米金利が低下し、ドル売り優勢の展開に一時111.99円をつけた。しかし、その後はやや値を戻し、11日は日経平均株価の上昇などを背景に112円台後半まで上昇したが、特段材料のない中で112円台前半までじり安となった。FOMC議事要旨(9月19~20日開催分)公表前後はやや振れ、議事要旨内で「一時的でない低インフレを懸念している」とハト派と取れる見解が示されるとドル売りが優勢となり、112円台前半まで値を下げた。12日も流れを引き継いでドル/円は水準を切り下げ、その後は一旦ドルに買い戻しが入ったものの上値重く推移した。翌日に米9月消費者物価指数等の発表を控えて調整色の強い動きが続き、13日のドル/円も112円台前半で軟調な推移。しかし、米9月小売売上高、消費者物価指数が市場予想を下回るとドル売りが強まり、一時週安値の111.69円まで値を下げた。その後は米10月ミシガン大学消費者信頼感指数が予想比強めの内容だったことや週末を控えて下値を追う展開とはならず、やや持ち直して111.86円レベルで越週した。

今週は、先週同様上値の重い相場を予想する。FF金利先物から見る年内の追加利上げが80%程度織り込まれている中、ドルをサポートする追加材料は出てきていない。斯かる中では、むしろ先週金曜日のように弱い米経済指標を受けて利上げ期待が剥落しドル/円が下落するリスクに警戒したい。22日(日)に予定されている本邦衆議院総選挙も、現与党の自民党・公明党が圧倒的優勢との世論調査の結果もあって一時期に比べれば警戒感是和らいだものの、イベントリスクの1つとなる。また、今週16日(月)から始まる米韓合同軍事演習や、18日(水)から開始される中国共産党大会に合わせてミサイル発射などの挑発行為に出る可能性も残存しており、地政学リスクも燻る。イベントを無事通過すればドル円には買い戻しが入りやすいと思われるが、明確に113円を上抜けていくには手掛かり不足か。有事の際の下落リスクに引き続き注意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/9~10/13)の値動き: 安値 111.69 円 高値 112.85 円 終値 111.86 円



## 2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.2000 130.00 ~ 134.00 円

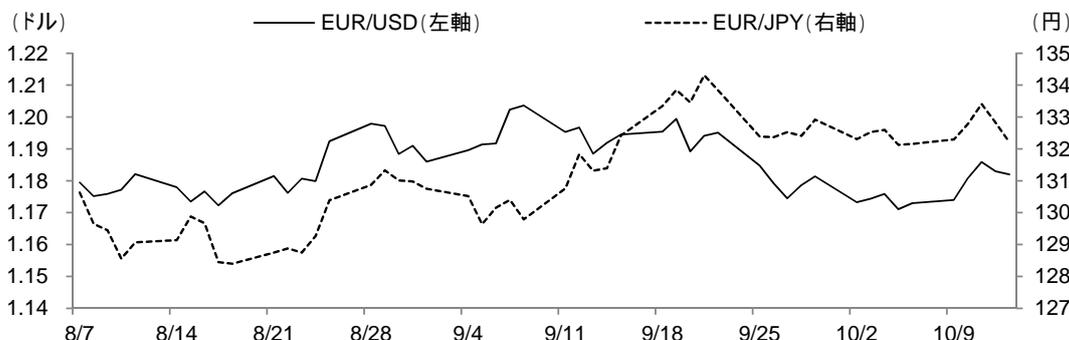
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上昇する展開。週初9日に1.17台前半でオープンしたユーロ/ドルは、一時週安値となる1.1740をつけたが、ラウテンシュレーガーECB専務理事が量的緩和の縮小開始に前向きな発言をしたことなどを背景に1.17台半ばまで上昇した。10日は、米金利低下を受けたドル売りに加え、カタルーニャ自治州のプチデモン首相が独立宣言を一時保留し、混乱回避の為に中央政府との対話を提案したことからユーロが買われ、1.18台前半まで続伸した。11日もドル売りは継続し、さらにFOMC議事要旨公表後にドル売りが優勢となると、ユーロ/ドルは1.18台後半まで上値を切り上げた。12日もドル売り地合いが続く中で一時週高値となる1.1880をつけたが、その後はドルに買い戻しが入ったほか、英国のEU離脱交渉でEUのバルニエ主席交渉官が、英国に2年間の単一市場アクセス維持を提案する可能性を示したことでユーロ/ポンドが急落する動きもあり、ユーロ/ドルも1.18台前半まで連れ安となった。13日は、注目された米9月消費者物価指数が市場予想を下回る中、ドル安の動きとなりユーロ/ドルは1.1875レベルまで上昇したが、スペインカタルーニャ自治州政府がスペインからの独立宣言の明確化の期限が週明けの16日に迫る中ポジション調整等の動きもあり、結局1.1820レベルで越週した。

今週のユーロ相場は翌週にECB政策理事会を控える中でレンジ相場を予想する。ユーロについては、足許ドル安・ポンド高の影響もあり上昇しているが、スペインなどの政治不安がくすぶり、来週にはECB政策理事会を控える中、ユーロを買い進める材料は見当たらない。また、1.2000レベルを超えた水準では、ユーロ高によるインフレ下振れを防ぎたい中銀サイドからのハト派寄りコメントが出る可能性もある。一方で経済環境は良好であることや、ECBが規模やペースは不明ながらも着実に緩和策からの出口に向けて動き出そうとしている中、積極的にユーロを売る材料もない。したがって、1.1600~1.2000でのレンジ相場を予想する。ECB政策理事会については、市場の一部では資産購入規模を月600億ユーロから400億ユーロに減額し数か月後(6か月等)に随時見直すとの予想が多い中、先週金曜日に当局者の話として月300億ユーロに減額し9か月続けるとの報道があった。今週は、ブラックアウト期間(当局者が金融政策に関する発言を控える期間であり通常理事会の1週間前)に入る前に、何らかの情報が出てくる可能性もあることから高官の発言には注意したい。その際には、どの程度減額そして継続するかに注目が集まりそうだ。17日にコンスタンシオECB副総裁、18日にドラキECB総裁、プラートECB理事、そしてクーレECB専務理事の講演が予定されている。政治サイドでは、スペインカタルーニャ州独立問題が注目となるであろう。スペインのラホイ首相はカタルーニャ自治州に対し、16日(同国午前10時)までに独立宣言をしたかについての回答を求めている。そして独立を公式に宣言したとした場合は、再考期間を与えた上で19日(同国午前10時)に独立を撤回するように要求しているが、仮に拒否した場合、政府は憲法155条を適用し自治権のはく奪に動く可能性が高いと言われている。迅速に同法適用の動きが開始される場合については、混乱は避けられるとの見方が多いが注目となるであろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/9~10/13)の値動き: (対ドル) 安値 1.1716 高値 1.1880 終値 1.1825  
(対円) 安値 131.86 高値 133.50 終値 132.21



(資料)ブルームバーグ

### 3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3150 ~ 1.3500 147.50 ~ 150.50 円

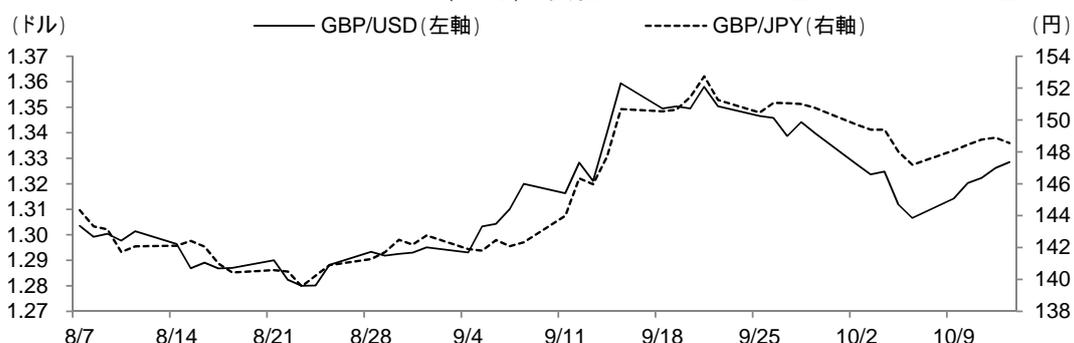
(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、欧州連合(EU)のバルニエ首席交渉官の発言により一時的に大きく下落する場面はあったものの、概ね上昇。ポンド/ドルは、9月上旬から始まっていたドル高トレンドの反転がサポートする形で、5営業日連続の上昇。週初1.31程度でスタートしたポンド/ドルは、1.33程度まで上昇した。11日のFOMC議事要旨では、年内利上げの可能性が再確認されたものの、ハト派的と捉えられた意見が多々あり、ポンド/ドルは小幅上昇。また13日に発表された米9月消費者物価指数(CPI)は市場の予想を下回り、これもポンド/ドルの上昇要因となった。他の主要通貨対比についても、ポンド/ドルほどではないものの、英ポンドは概ね上昇する展開となった。ただし先週は、英国のEU離脱交渉に関するヘッドラインで、英ポンドは上下に振られやすい地合いでもあった。12日には、バルニエEU首席交渉官が、英国のEU離脱交渉が行き詰っていると発言したことから、英ポンドは急落し、ポンド/ドルは1.325程度から1.315を一時割り込み、ポンド/円は149.00円程度から147.50円程度まで下落した。しかしその後、バルニエEU首席交渉官が2年の移行期間について英国のEU市場へのアクセスの維持を提案したと報じられたことから、英ポンドは急反発し、当日の下落幅をすべて戻す形で上昇。13日には、ドイツ首相報道官が、英国のEU離脱交渉について、移行期の取り決めを協議するのは時期尚早であると発言し、瞬間的にポンドが急落する場面があった。ヘッドラインに振られやすい展開ではあったものの、ポンド/ドルについては、月曜日から5営業日連続の上昇をしており、先週は2週間続いた英ポンド下落相場が反転した一週間となった。

今週の英ポンド相場は、横ばいを予想。先月からのドルの上昇基調が反転し、今週も引き続きドル安が想定されることから、ポンド/ドルについては上昇しやすい地合いであると考えられるが、他の主要通貨対比では概ね横ばいとなるだろう。今週も先週同様、英国のEU離脱交渉に関する、各国要人の発言が注目されやすい展開となるだろう。メイ首相の求心力が弱まる中、先週のようにEU離脱交渉の不透明感を高める発言がEU側からあれば、一時的な英ポンドの急落は免れないだろう。ポンド/ドルのオプション市場については、1WのATMのボラティリティが8.8%程度と、先週から徐々に上昇しており、EU離脱交渉に関するヘッドラインのリスクを警戒する動きが高まっている。今週はEU側の要人の発言に注目しつつ、英国のEU離脱交渉の行方を見極める時間帯にしたい。一方で、英中銀の早期利上げ期待についても依然として注視していく必要がある。9月MPCの金融政策サマリーでは、「過半数のMPCメンバーは向こう数か月で金融緩和の縮小を見込む」との記述があった。英中銀が数か月のうちに金融緩和の縮小に舵を切る可能性が高まれば、ポンドのもう一段の上昇が見込まれるが、9月以降のポンド高が物価の押し上げを抑制する可能性は高い。英国のEU離脱交渉と英中銀の金融緩和の縮小という、英ポンドの方向感を占う上で重要な二つの大きなテーマの着地点が見つかるには、未だ少し時間がかかりそうだ。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/9~10/13)の値動き: (対ドル) 安値 1.3060 高値 1.3337 終値 1.3282  
(対円) 安値 146.96 高値 149.27 終値 148.56



(資料)ブルームバーグ

#### 4. 豪ドル

(1)今週の予想レンジ: 0.7800 ~ 0.8000 87.50 ~ 89.50 円

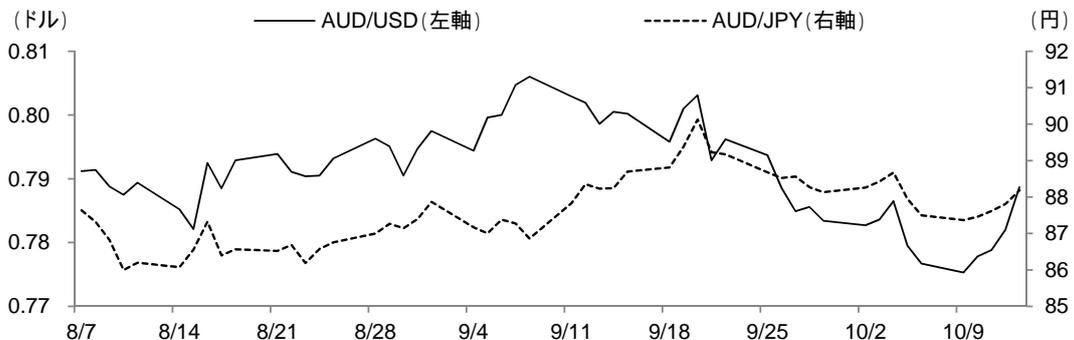
(2)ポイント(先週の回顧と今週の見通し)

先週の豪ドル相場は、堅調推移となった。対ドルでは週初9日、0.77台後半でオープン。中国が国慶節明けとなったものの米国や本邦が休場で市場参加者が限られ、特段材料がない中で0.7747の週安値をつける。翌10日、堅調なアジア株にサポートされ、0.77台半ばから後半まで上昇。但し、北朝鮮の朝鮮労働党創建記念日として警戒感も燦る中、0.78台に乗せるには至らなかった。週央11日、FOMC議事要旨(9月19~20日開催分)が発表され「一時的でない低インフレを懸念している」との見解が伝わり、ドルが弱含んだことで、0.77台後半にて堅調推移。前日10日に北朝鮮が新たな挑発に出なかったこともリスクセンチメントの改善につながった。翌12日、日米を中心に株高が顕著となるなど、リスクセンチメントの改善が続く中0.78台前半まで上昇。週末13日、発表された豪州準備銀行(RBA)金融安定報告書において不動産市場の過熱抑制策は奏功しているものの、住宅ローンなど家計債務が高水準で金利上昇が家計にとって打撃となる可能性がある」と指摘されたが相場への影響は限定的。但し、中国9月貿易統計において鉄鉱石が前年比+11.0%と過去最高となったこと報じられたことや、全般的にドルが弱含んだことにサポートされ、0.78台前半まで上昇。発表された米9月CPIが予想を下回るとドル売りが進み、0.7898の週高値をつけた後、同水準で越週した。対円では87円台前半でオープン。翌10日にドル/円が112円ちょうど近辺まで下落すると豪ドル/円は週安値87.25円をつける。その後週末にかけてじり高となり、13日には週高値88.31円をつけ、88円台前半で越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い展開を予想。豪州では今週19日(木)に豪9月雇用統計の発表が予定されている。前回の豪8月雇用統計は正規雇用を中心に雇用者数が大幅増加していたが、良好な労働市場環境が継続するか注目される。結果次第では上下両方向に振れると考えているものの、単月の結果のみで相場の方向性が固まるには至らないと考える。豪州以外の地域に目を向けると、まず米国ではFRB高官の講演が複数予定されている。金利先物市場における米12月利上げ織り込みは先週こそ8割弱まで上昇していたものの、先週末発表された米9月消費者物価指数(CPI)の結果や、まだ12月会合まで2か月あるという時間的な距離を踏まえると、一段と織り込みに行くことは難しい印象。どちらかといえば、過度な織り込みが縮減する格好で豪ドルのサポート材料となると考える。また、中国では18日(水)から中国共産党大会が開幕する。5年に一度の同大会で習国家主席が一段と政治基盤を固めるとみられ、開催期間中に相場急変などが起こらないよう中国当局が市場を厳しくみると考える。これはリスクオフムードになり難いという意味で豪ドルをサポートし得よう。19日(木)に中国7~9月期GDPの発表が予定されるも、党大会会期中のため、大きな動因にはなり難いだろう。最後に本邦では22日(日)に衆院議員選挙が実施される。今週、仮に自民公明両党で過半数を獲得できない事前調査が出てくると、アベノミクス継続への期待から上昇していた日経平均株価が下落するなど、リスクセンチメントが後退し、豪ドルは対円中心に下落するだろう。しかし、足許公表されている与党優勢を伝える各社世論調査結果が大きく変わらない範囲においては、豪ドル相場に下押しすることはなさそうだ。その他には、今週は17日(火)にRBA議事要旨の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/9~10/13)の値動き: (対ドル) 安値 0.7747 高値 0.7898 終値 0.7895  
(対円) 安値 87.25 高値 88.31 終値 88.18



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。